大陸の花嫁　～彼女たちはなぜ海を渡ったのか～

東京の満蒙開拓団を知る会　藤村　妙子

「大陸の花嫁」と呼ばれ、海を渡った女性たちがいた。「王道楽土」を目指して開拓団となった家族に連れられて満洲へと渡った女性たちもいた。かの地で生まれた子どもたちもいた。そして、彼女たちのことは、敗戦間際のソ連の侵攻に伴う逃避行の被害者として語られることが多い。しかし、なぜ彼女たちが海を渡ったのか、それはどのような仕組みの中で行われたのかは、あまり知られていない。「貧しい農家の女性が口減らしのために満洲へ行った」というようなことが彼女たちを語る多くの本や映像に紹介されている。私は、東京からの開拓団について調査研究する中で、「本当にそれだけの理由だったのか？」という疑問を抱かざるを得なかった。この小論は、公文書、当時の発刊物、先行研究などに触れながら、この疑問を解いていく目的で書いたものである。

初期の花嫁

1932年から始まった満蒙開拓団へは男性のみが送り出されていた。しかし、日本人を大量に移民させ満洲支配を確固としたものにするためには「よき伴侶」としての女性の送り出しが必要だということは、当初より指摘されていた。1933年2月「満蒙開拓の父」と呼ばれた東宮鉄男は、「新日本の少女よ大陸に嫁げ」という歌を作詞している。

この事実から当初より花嫁として多くの女性が送りだされているように思いがちであるが、1934年に第一次移民団の花嫁として約30名が、翌年に第二次移民団の花嫁として130名が渡っているが、大々的な送りだしは、まだ始まってはいない。

では、当初はどのような女性たちが海を渡ったのだろうか？

1934年夏に東京府が、目黒区にあつた洗足高等女学校校長前田若尾らに依頼して満洲移民に関する調査を行っているが、帰国後の彼女の以下の報告書の中に、その答えの一つがある。

婦女新聞1935年3月31日に掲載された「満洲視察の収穫　全女性に対してのお願い」と題する文章で、「チチハルにいる我国人は2000人、その中300人は女だそうですが、いかがわしい商売のものが200人だということで、各地ともこの割合はあまり変わらぬようです。（中略）私は到る所で女性の欠乏を痛感しました。」と書き、病院、孤児院、教員、タイピスト、ホテルの事務員等として女性が満洲で働くこと、そして働いている独身男性の妻となることを訴えている。この時には、前田は女性たちに「開拓団の花嫁」になることを呼びかけてはいなかったのである。

初期の「花嫁養成所」

（写真：『写真週報』73号、1937年）

異郷の地に花嫁として渡るために訓練所が作られているが、関東地域では、海外婦人協会が、神奈川県中里村上谷寺（現横浜市青葉区みたけ台）に「女子農民道場」を作っている。ここは、1936年7月4日に開場したもので「南米へ満洲へと行く海外移民の花嫁たちに農業の実際を教え、第一線の花嫁にふさわしい精神を吹き込む」ことを目的にして作られた。1938年には、同所に「満蒙を目指す花嫁道場」も作られている。敷地面積は、約六町歩。ここについて、当時満洲で活躍していたジャーナリストであり女子教育にも熱心であった望月百合子は、『大陸に生きる』（1941年刊・復刻版，ゆまに書房，文化人の見た近代アジア6）の中で、「この協会で経営している花嫁学校は三ヶ月修業で費用は一切無料。お嫁入りの世話までただでしている。雨の日にこの学校を訪れると生徒は6人で第二期生、第一期生はみなすでに北満の花嫁になって現地に行っている。この6人の花嫁の他に村の女子青年団の人々が5、60人集まって来た。この素朴な乙女達を前にして満洲の話をしみじみと語りだすと、娘たちは瞳を輝かせてきいてくれる。」とリポートしている。

また、警察官家庭婦人協会によって「警婦協会家庭学校」が目黒区上目黒に作られ1936年4月10日開校している。当初は「警察官の花嫁養成」を目的にしていたが、「時代に適合して社会各方面に将来有意義なる家庭生活を営み得る婦人の養成に努め・・・今後は積極的に鮮・満・支進出の花嫁の養成と結婚媒酌に邁進」（1938年8月21日『婦女新聞』）することになった。ただ、注意しなければならないのは、この時期この団体が斡旋していた「花嫁」とは、現地の公務員や会社員等のサラリーマンの妻が主で、開拓団の花嫁斡旋は少しずつ行われていたことである。

国家的事業としての花嫁の送り出し

以上のように、この時期の満洲への女性の送り出しや花嫁の斡旋は、開拓団に対してだけではなかった。したがって、こうした「花嫁の斡旋」では開拓団の嫁になりたいと名乗り出る者も少なかったのであろう。多くの開拓団においても同様の状態であり、当時問題となっていた「屯墾病」の原因の一つに「嫁が来ない」が挙げられていた。1936年には「20カ年100万戸」送り出し計画が始り、「農業移民一戸あたりの家族数を5人」と計算され、これに呼応する形で、37年頃より移民が盛んだった長野県、山形県などで、県主催の「女

子拓殖講習会」が開催されている。長野県では、「昨年 4・月より長野県御牧ケ原農民道場に女子部をつくり、花嫁養成訓練を行っている」(『写真週報』昭和 13 年 5 月 4 日号) とある。しかも、38 年に作られた満蒙開拓青少年義勇軍が国内訓練、外地訓練を経て各開拓団に配属される 41 年に向けて彼らの定着のためにも「花嫁」の確保は急務となっていた。

1939 年 2 月 13 日第 74 回帝国議会衆議院建議委員会第一分会において伊藤五郎議員、森田重次郎議員 (他賛成者 27 名) より「女性移住者養成道場設立ニ関スル建議」が提出された。この建議の理由書には次のようにある。

> 盟邦満洲国の育成と東亜新秩序の建設とは我が帝国不動の国策なり而してこの国策遂行に当たり我が国民の大陸への進出問題は如何に重大性を有するかは殆ど議論の余地なかるべし然り而してこの大陸進出の成功不成功は一つに懸かりて将来大陸の花嫁となるべき女性の有無並其の良否に存す然らばこの花嫁の問題は洵に満洲国の育成並東亜新秩序建設の成否を決する鍵なりと謂うも過言にあらざるなりて政府は一日も速に全国道府県各地に将来大陸の花嫁となるべき女性の養成機関を設立し女性に対して大陸の重要性を普及徹底し大陸進出は正に女性の祖国に対する一大責務なることを自覚せしめ以って満洲国及び支那大陸の長期建設途上に横たはる現在及び将来の大陸花嫁問題を解決するは最も肝要なりと信ず是れ本案を提出する所以なり (原文はカタカナ)

この建議における議論で伊藤は、「一日も速やかに全国道府県各地に、将来大陸の花嫁となる所の女性の養成機関を設置しまして (中略) 大陸花嫁問題を解決することが最も重要であろうと信じます」と発言し、これに対して平沼騏一郎内閣の寺田市正拓務次官は、「政府も同感の意を表する (中略) 今日まで各府県をしてそれぞれの既設の農民道場、或いは農学校等の施設を利用しまして、女性の拓殖的訓練を実施せしめるよう指導しつつあるのでございます、尚お之を積極化する必要を認め」「昭和 13 年には 9 万 1650 円、昭和 14 年には 16 万 3500 円になっています、これが 46 府県に対する女子拓務訓練の為の助成費でございます」と答えている。

まさにここにおいて国家的事業としての「大陸の花嫁」の送り出しが開始されたのである。

東京においては 1939 年 (昭和 14 年) 6 月 15 日「多摩川女子拓務訓練所」が開設された。「多摩川女子拓務訓練所」訓練生の募集状況を読売新聞は 39 年 2 月 14 日付で次のように書いている。

> これまでは移民の花嫁志願者が少なく、昭和 12 年にも (中略) さがしまわってやっと 49 人しか集まらぬ状態で、大陸では花嫁飢饉を来していた。
>
> ところが、事変以来銃後女性の覚醒から花嫁希望者が激増。昨年 4 月から現在まで早くも 54 名が花嫁となって大陸へ進出し、希望者もこれまでは田舎の小学校卒業者ばかりであったのが最近は都会の高女卒業者がどしどし申し込んでくる有様
>
> 本年度までに少なくとも 7、80 名は突破する見込みになったので府はいよいよ 4 月から矢口の農業移民訓練所跡地に「花嫁訓練所」を開設。三ヶ月で 30 名宛て一ヵ年

に 120 名の大陸の花嫁を養成することとなった。

開所の翌日の読売新聞夕刊には開所式の様子を次のように伝えている。

拓士達に良き花嫁を送るため東京府学務部で計画した多摩川女子拓務訓練所の開所式は 15 日正午蒲田新田神社付近の同訓練所で行われた。選ばれた花嫁候補生 20 名は、朝 9 時 30 分若き希望に燃えて東京府庁に集まり学務部職員に引率されて省線電車で出発、訓練所に赴き正午から厳粛な入所式をあげた後茶話会を開いた。9 月一杯まで公民科、移民農業科、家事科実習と三ヵ月半の寄宿生活の間にみっちり花嫁教育を仕込んで土の戦士達を世話する筈で、7 月初旬には更に 20 名を増員する予定。

こうして訓練所は全国そして満洲にも作られたが、1941 年 9 月 10 日発行の『週報』257 号「伸び行く女子拓務訓練所」の中で次のように位置づけられている。

満洲開拓事業に女性の積極的進出を促すため、昭和 13 年度に拓務省助成の下に、23 府県に於いて府県主催で女子拓殖講習会が開催され（中略）世間ではいわゆる「大陸の花嫁講習会」と呼んでいた。（中略）昭和 14 年度、15 年度と引き続いて北海道以外は全国漏れなく実施され、15 年度には述べ人員 7 千余名が講習会に参加した。昭和 14 年度から拓務省では、右の講習会の訓練を統一するため、女子拓殖指導者の養成をはじめ現在までに 161 名養成されている。（中略）

この内地の女子拓殖講習会と同じ趣旨で昭和 15 年度に満洲国北安省鉄驪県第七次案拝開拓団に案拝開拓女塾が開設され、これがきっかけとなって昭和 16 年度に日満両国政府助成、開拓団経営の下に開拓塾が設けられ、合計 200 名を入塾させることとなった。開拓女塾は、満洲における内地女子を対象とする女子拓殖訓練施設であるが、開拓民の花嫁たる決意を有する者を対象とする度合が相当強く、これが一つの特徴である。（中略）

この両者は拓務省の助成の下に行われている女子拓殖事業であるが、一方各府県並びに各種婦人団体を経営主体とする女子拓殖訓練所も現在までに数府県に設置されている。東京府女子拓務訓練所（上宮教会並びに修養団委託）や日満帝国婦人会関西女塾等がそれである。

開拓団花嫁は、このような拓殖訓練のいづれかを経た者の中から斡旋され満洲に進出するのであるが、勿論縁故関係を辿る世間一般の結婚形式もあり、しかも斡旋数はこれが一番多いようである。

以上のように当時「大陸の花嫁」は、一般的な「仲人による結婚」という形式を取るものも多かったが、「大陸の花嫁講習会」、満洲現地の「開拓女塾」、そして府県や団体が設置した「女子拓殖訓練所」という 4 つのルートを通って斡旋されていた。
この多摩川女子拓務訓練所は東京府が設置し、上宮教会、修養団によって運営されたが、1941 年ごろ移転し、修養団によって運営されていた。また東京においては、民間の訓練所のほかに、1943 年東京都が運営する東京都女子拓務訓練所が作られている。

「大陸の花嫁」に課せられた役割

ところで、この「大陸の花嫁」に課せられた役割とはどのようなものであったのであろうか？

『満蒙開拓青少年義勇軍』(上笙一郎著，中公新書，1973年)　には、「満蒙開拓青少年義勇軍綱領」に似た「女子拓務訓練生信条」があったことが書かれているが、この「信条」には「大陸の花嫁」に課せられた役割が簡潔に表現されている。

1　私ハ万世一系ノ皇室ヲイタダキ奉ル皇国ノ臣民デアリマス。
1　私ハ興亜ノ聖業ヲ遂行シツツアル大日本ノ女性デアリマス。
1　心身ノ修練ニ務メカナラズ、天皇陛下ノ大御心ニ副イ奉リマス。

そして、「日本古来の家族制度を取り入れた厳正な農村共同体の確立と家産の永代世襲、勤労開拓主義」を主旨とする「開拓農場法」が 1941 年満洲国で公布されている。また、拓務省「女子拓殖指導者提要」(1942 年) に「満洲開拓地での女性の役割」が以下のようにまとめられた。

1 開拓政策遂行の一翼として
イ　民族資源確保のために先ず開拓民の定着性を増強すること
ロ　民族資源の量的確保と共に大和民族の純血を保持すること
ハ　日本婦人道を大陸に移植し満洲新文化を創建すること。
ニ　民族協和の達成上女子の協力を必要とする部面の多いこと。

2 農村共同体に於ける女性として
イ　衣食住問題を解決し開拓地家庭文化を創造すること。

3 開拓農家に於ける主婦として
イ　開拓農民の良き助耕者であること
ロ　開拓家庭の良き慰安者であること。
ハ　第二世の良き保育者であること。

そして、太平洋戦争末期になるとさらに、戦時体制下で一層の「民族の純血」を守るものとして位置づけられる。1943 年、農政学者であった小野武夫は、「民族農政学」の中で大陸の花嫁を送り出す意義について次のように書いている。

開拓農村は国防第一線の背後に在って平戦両時重要の任務を帯びるものであれば、開拓農民の血液は常に純日本民族を以て清浄に保たなければならなぬ。今、画期的に重要なる第二期五ヶ年計画に際し、配偶者の導入に成功しないならば、やがては満人婦女を妻とするものが生じないとは限らない。今後若し徒に五族協和の美辞麗句に酔うて満人婦女子と婚を通じ、其の間に生まれたる子度もが原住民を母とし、祖母とす

る所謂第二世、第三世の開拓団員が発生するようになったならば、他日一旦事ある日において、開拓民の愛国心はそれが為に脆弱となり、否往々にして不倶戴天の異分子化することなきにしもあらずである。

このように、満蒙開拓の目的であるこの地に日本人を増やすことを貫徹するために「大陸の花嫁」の送り出しは行われたのである。

女性指導者の果たした役割

そして、見逃すことができないのは、当時の指導的な女性の果たした役割である。東京府の依頼を受けて、満洲調査旅行をした前田若尾をはじめ、大妻コタカなど当時の女性教育の第一人者が渡満し、「大陸の花嫁」になることの意義を報告記事として様々な雑誌・新聞などに発表している。

そして、当時としては先進的「職業婦人」でアナーキストの洗礼も受けたことのある望月百合子もまた「満洲」への夢を少女たちに語っていたことである。望月百合子は戦後当時のことを問われ「私は本当にあの地で理想郷を建設できると思っていた。たとえ侵略の地であろうと、日本が掲げていた王道楽土のスローガンを逆手にとってやろうと思ったの。少なくともスローガン通りにあの国を理想郷に近づけようと思い、必死で死に物狂いでがんばる人間の邪魔はできないだろうって。骨を埋める覚悟で命を賭けて働いたんですよ。敗戦ですべての努力は水の泡になってしまったけど、それを侵略という言葉だけで片付けられたくないの。その思いだけはわかってほしい。」(『大陸に生きる』復刻によせて)　満洲という「理想郷」に魅せられ、がんじがらめの内地から逃れた人たちは多い。そうした人たちの「夢」の実現が、結果として国家政策の推進となっていたことを気づけなかったことの意味は深い。百合子が慕っていたアナーキストの石川三四郎は「渇しても盗泉の水は飲まず」と彼女の満洲行きを反対したという。

女性たちはなぜ大陸の花嫁になったのか

このように、様々な手段で「大陸の花嫁」は送りだされた。では、なぜ、彼女たちは、大陸に渡ったのだろうか？

多くの先行研究では、貧しさの中から大陸の花嫁になったということが語られているが、彼女たちの出身階層についての統計的な数字はほとんどない。私が研究した、東京から大陸の花嫁になった人の例では、貧しさだけではなく「生きがい」や「憧れ」を求めて花嫁になった人たちもいた。また、以下の新聞記事にあるように、女学校を出た人や会社員、教師なども「訓練所」への入所を希望している。

30名の応募人員に対して早くも8日までに83名に達し係員を感動させている。申込者の中には北海道、仙台等から各1名、山形県3名あり、神奈川、千葉県等の近県

から申し込み殺到し、市内は約6割を占め年齢は23、4歳が一番多く、高女出身者が1割を占め、市内某高女に教鞭をとっている一女性が混じっている。(1939年(昭和14)3月9日朝日新聞)

同年11月21日朝日新聞夕刊に、嫁ぐ日を前にした記事が載っている。

去る7月入所以来晴耕雨読式な四ヶ月間の花嫁修業をこのほど終えた第1期生16名は今月末から来月初旬にかけ秋の収穫を済ませて上京する北満東京郷の青年達に迎えられて明朗な東京花嫁部隊として遠く吉林省の奥地、興隆川の拓地に乗り込むことになった(中略)。先に渡満した同訓練所の先発花嫁7人から新家庭建設の希望に満ちた現地便りが舞い込んできた、その中の北満の国境に近い黒咀子開拓団部落に嫁いだ荏原区の某会社重役邸の女中さん(中略)なお同訓練所には第2期生として同じく16名が既に入所、先輩株の姉さんたちに交わって訓練をうけている。

ここで明らかになったことは、都会で働いていた女性たちが「大陸の花嫁」になっていること。そして、実際に渡満したかは明らかではないが、応募の段階ではかなりの高学歴の人たちがいたということである。また、第1期生の応募者は80名以上いたが、実際に入所したのは先に引用した6月16日の読売新聞記事によれば20名であり、7月初旬には更に20名が増員されたとしても40名、第一期生として花嫁になったのは、23名だった。応募者の半分が入所し、また入所者の半分が渡満したということは結婚という人生を左右する選択であり、また「家」意識の強かったこの時代において「大陸の花嫁」になるというのはハードルが高いことであったということではないだろうか。

また、大妻高等女学校の創始者大妻コタカは、1948年12月号の『拓け満洲』に「年若き女性に贈る～移住地を視察して～」として、つぎのような心得を書いている

一家を形作っていく上になんとしても配偶者を満洲に送らねばならないのですが此の配偶者が漫然として渡満して行き、大地主になろうとか、一攫千金を夢見たり、夫と二人きりで姑のない気楽なちやほやした生活をしようと言うそんな浮薄な心の持ち主が行っては困る。そういうものが行っては、足手纏いになり、そういう人が行ったのでは折角一致協力して勇猛邁進している青年の気を鈍らせたりするから、そういう人は絶対に行ってはならぬ。各県で是非そうした人を指導訓練していただきたい。

国策雑誌『拓け満蒙』や改題された『新満洲』『開拓』はこのような言説がたびたび出てくる。裏を返せば、それほど「地主になれる」「姑のいない気楽な暮らし」を夢見て渡満した女性が多かったという表れでもある。狭い日本の中での、舅、姑、小姑に囲まれた「嫁」としての生活の息苦しさに比べれば、新天地での夫と二人だけの生活、しかも現地人を雇った「地主生活」これに魅力を感じて「大陸の花嫁」になった人が多いことは容易に想像がつく。実際に一時的ではあれ家族制度からの解放であったことは、数多くの手記が示している。しかし、このことを肯定すれば、「家制度」の破壊につながりかねない。本音を「教

育、訓練」で覆いつくす、そのためにも「女子拓務訓練所」は必要だったのである。

また、「都会」の「女学校教育」を受けた女性たちが嫁いでいるということがことさらに宣伝されている。都会からの「花嫁」の記事には必ず高学歴や公務員、会社員などの女性たちの話が出てくる。家が貧しいから満洲へ嫁に行かせるのではない。女でもお国に役立つことを示すために行かせるのだと、本人、家族が思い周囲もそう思わせることが必要だったからであろう。

「大陸の花嫁」はこうして送り出された。擬似的な「自己実現」や「家族制度からの解放」は、他国の民の土地を奪う侵略行為の一端を担っていたということを忘れてはならない。そして、同時に、敗戦後の逃避行やその後の残留邦人、とりわけ「残留婦人」に対する政策をみれば、国家による棄民でもあった。

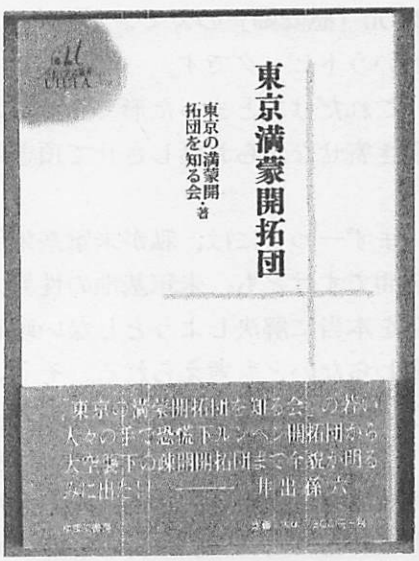
「大陸の花嫁」研究について

「大陸の花嫁」については、その送り出しの様子や仕組み、当事者の証言などを基にした優れた研究がある。以下、簡単に紹介したい。

『満洲「大陸の花嫁」はどうつくられたのか』（相庭和彦他著，明石書店，1969 年）では、官製のジャーナリズムやその他「少女雑誌」、新聞での宣伝やニュース映画が作られ、少女たちに満洲へのあこがれを煽っていったことが詳しく書かれている。

『「満洲」に送られた女達　大陸の花嫁』（陣野守正著，梨の木舎，1992 年）には、送り出しから逃避行まで証言を中心にしながら資料も交えて全体像が明らかになっている。

『満洲女塾』（杉山春著，新潮社，1996 年）には、満洲に作られた「女塾」の実態が詳しく書かれている

『東京満蒙開拓団』（東京の満蒙開拓団を知る会著，ゆまに書房，2012 年）の第五章で筆者が「東京からの大陸の花嫁」についてまとめている。

花嫁だった方の多くがすでに鬼籍に入られ、証言を得られる時間はわずかしかない。「大陸の花嫁」研究は、もはや時間との勝負と言ってもいい時期に来ている。この小論を読まれた方が、是非各地域に眠る資料の発掘や証言の掘り起こしをされ、是非この史実を次世代につなげていかれることを願っている。